

「作者」という仮面：三島由紀夫『仮面の告白』論

稲田，大貴
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/19423>

出版情報：九大日文. 15, pp.41-54, 2010-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

「作者」という仮面

——三島由紀夫『仮面の告白』論——

稲田 大貴

一 はじめに

『仮面の告白』は昭和二十四年七月に河出書房より、「書き下ろし長篇小説」シリーズの一作として刊行された。本作は三島由紀夫の自叙伝的要素が極めて強く、作品と作家の距離をめぐってこれまで多くの研究がなされてきた。『仮面の告白』における出来事の殆どは事実に基づいており、それゆえに本書は三島の私小説として受け取られることが多かった。特に作中における同性愛の描写によって、三島が同性愛者であるという、いわゆる「同性愛伝説」が形成されるに至り、『仮面の告白』はかなり三島自身と重ねて読まれることが多い作品であると言える。この点については村松剛が『三島由紀夫の世界』（新潮社平成二年九月）において、三島が同性愛者であったことを否定しているが、それに対し、福島次郎がその後『三島由紀夫——剣と寒紅——』（文藝春秋社平成十年三月）において、自身と三島のホモセクシユアルな体験を書いており、未だ決着を見ているとは言い難い。とはいえ、本稿では同性愛を巡る問題を取り上げたい訳ではない。問題は、テクストと作家の距離にある。

本稿は作品（テクスト）と三島由紀夫自身（作家）を切断する立場を採る。それは作家を参照したテクスト読解に拠らず、またテクスト読解を作家自身の意図に接続しない、ということである。しかし、テクストが書かれたものである以上、必然的に「作者」を要求する。この「作者」と現実の作家とは決して同一のものではない。「作者」とはテクストの側から立ち上がってくる、作家というテクストを構成する糸のようなものである。本稿は『仮面の告白』というテクストから「作者」を見出す試みである。それは「作家としての三島由紀夫」というテクストを構成する糸を紡ぎ出す試みであり、本稿はその一つに位置付けられる。

なぜ『仮面の告白』を取り上げるのか、この点に言及しておく必要があるだろう。それは先に述べたように『仮面の告白』における、テクストと作家の距離が非常に曖昧であるという点にある。それゆえにテクストに書き込まれたものを三島自身に接続する読みが許容されてきた。先に挙げた「同性愛伝説」などはその典型例と言える。一見すると私小説のように見える『仮面の告白』は、いわゆる「三島らしさ」が認知される根源となっているテクストであり、テクストと作家が極めて直接的に結びつけられていると言える。しかし「仮面の告白」というタイトルが付されている以上、テクストに書かれていることと作家自身とを直接につなげることは危険を伴う。まずはテクストから見出される「作者」について考えてみる必要があるように思われる。このように「作家としての三島由紀夫」というテクス

トを構成する個々のテキストに内在する「作者」の位相を考えると、『仮面の告白』というテキストは大きな問題を孕んでいるのである。

二 問題の所在

本稿の問題点を提示する前に、作家、三島由紀夫と『仮面の告白』の「作者」の関係性について述べておかねばならない。問題点は、そこから立ち上がってくる。

加藤典洋はJ・デリダを引用しつつ、次のように述べる³⁾。

ここに新たに再定義された〈作者の死〉(バルトの言うそれと区別するためこれをヤマカツコで示す)とは、第一義的には、書き手のうちに現実の作者が「中立変容」して——現実的判断立を「中立化」させて——存在しているということである。そこには、現実の作者と書き手との断絶がある。発語連関において、これは現実の作者の(像化)という契機をなし、受語連関において、これはテキストが読み手に「作者の像」を信憑させる契機として現れる。

(加藤典洋『テキストから遠く離れて』講談社 平成十六年一月)

ここで加藤が述べる〈作者の死〉とは、発語主体(現実の作家)によって何かが言語化される時、現実の作家が、言語化されたものの書き手(テキストから見出される「作者」)に変容(像化)す

ることで、「微弱な死」を遂げ、「不在」化することを指す。しかしテキストが受語主体(読者)によって受容される時、テキストから立ち上がる「作者」は信憑されることで、一つの「作者の像」として立ち上がってくるのである。この考えに倣えば、三島由紀夫によって書かれた『仮面の告白』というテキストから見出される「作者」は決して三島由紀夫自身ではなく、像化した「三島由紀夫」である。しかし作家としての三島由紀夫はこの「三島由紀夫」を通じてのみ、見出されうると考えられる。以上を踏まえた上で、本稿の問題点を提示したい。

近年の『仮面の告白』研究において最も重要視されているのは、書き手としての「私」の存在である。『仮面の告白』は、書き手としての「私」が、過去の自分自身を作中人物として語るという構造を持っている。加藤は橋本治『「三島由紀夫」とはなにものだったのか』(新潮社 平成十四年一月)を踏まえ、次のように論じている⁴⁾。

むろん先の一文における「書く自我」が芸術家である三島由紀夫であり、「書かれる自我」が戸籍上の個人である平岡公威なのである。三島由紀夫が「平岡公威」を模倣し、「平岡公威」になって書くことで、「三島由紀夫」の到来以前に預言者バプテスマのヨハネとしてそこにオリジナル・モデルⅡ第一人者として生きてきた平岡公威は、そこに生まれる作者たる「三島由紀夫」のイエスとしての到来によって逆に「整理され再編成され」て、オリジナル・モ

デルとしては姿を消す。そして作品が書かれた後には、それまでの「筆名三島由紀夫」戸籍上の個人平岡公威たる實在、『盗賊』を書くまでの作者三島由紀夫に代わり、戸籍上の個人平岡公威をそっくりくりぬいた仮面だけの実在である新しい作者、「三島由紀夫」が生まれているのである。(前掲『テキストから遠く離れて』)

加藤は「書く自我」を「芸術家である三島由紀夫」と見なししている。これは書き手としての「私」と「作者」を区別していないことを指す。しかし『仮面の告白』においてこの二つは明確に非同一である。この点に関しては後述するが、ここではこの二つの概念が異なるものであることを示しておく。加藤論において、この二つが区別されていないことは、一つの問題を提示する。「告白」をしているのは「誰」か、という問題である。加藤は告白者を書き手としての「私」||「作者」と捉えている。この点について、梶尾文武と佐藤秀明の論を引用してみたい。

表題に戴かれた「仮面」とは、一人称の下に告白する「私」が『仮面の告白』を書く作家・三島由紀夫を指すものではないという仮構性を示すための形象にはかならない。ところがこの「私」は反復的に「今かうした奇矯な書物を書いている」ことに言及し、書くという行為それ自体の機微を記述してもいる。その意味で本書は書き手の存在を捨象し

てはいない。書き手としてふるまう「私」と、作家すなわち三島由紀夫との同一性が捨象されているのだ。(梶尾文武「三島由紀夫『仮面の告白』論——書くことの倒錯——」『日本近代文学』平成十九年五月)

そうすると、書かれる「私」||書く「私」||書く三島という等式が成立することになる。正確に言えば、書く「私」についてのメタレベルでの自己言及がないわけではないが、それは思わず出たままの純びのようにも思われる。この等式によれば、川端が「川端康成なる作品」であるように、書く三島は、書かれる「私」で、「三島由紀夫なる作品」に自己を擬したことになるのである。というより、「川端康成論の一方法」を書くことで、書かれる「私」||書く「私」||書く三島という等式を『仮面の告白』の方法としたと考えた方がよいだろう。(佐藤秀明「作者」についての提起——『仮面の告白』を例として『日本近代文学』平成十九年十一月)

梶尾論では書き手としての「私」と作家は非同一と見なされており、書き手としての「私」はあくまでもテキスト表象の一部として捉えられている。一方、佐藤論は、書かれる「私」||書く「私」||書く三島という見方を示しており、作家と書き手としての「私」を同一のものとして見ている。このように三氏の論を概観すると、それぞれに書き手としての「私」の捉え方が異な

っている。ここから本稿の問題点が見出される。三氏の論は書き手としての「私」と「作者」との関係の捉え方こそ異なるものの、「仮面の告白」をしているのは書き手としての「私」であるという点において共通している。しかし「仮面の告白」をしているのは書き手としての「私」だけなのだろうか。テクストのタイトルとして戴かれている「仮面の告白」というエクリチュールは、書き手としての「私」によるものではない。これは明らかに「作者」によるものである。そうであるならば、「仮面の告白」をしているのは「作者」であり、また書き手としての「私」でもある。これは、「作者」の「仮面の告白」≡書き手としての「私」の「仮面の告白」、ということではない。書き手としての「私」の「仮面の告白」はあくまでもテクスト表象であり、それこそが「作者」の「仮面の告白」であるはずである。従って本稿では「誰が」「どのように」「何を」「告白」しているのかという問題意識の下、書き手としての「私」の「仮面の告白」という表象から、「作者」の「告白」を見出すことを目的とする。

三 「私」・仮面・「作者」

『仮面の告白』の「私」は、二つの次元において存在する。一つは書かれる「私」であり、もう一つが書き手としての「私」である。

——きけばきくほど、十八歳の、夢みがちな、しかもまだ自分の美しさをそれと知らない、指先にまだ稚なごの残ったピアノの音である。私はそのおさらひがいつまでもつづくことをねがった。願事は叶へられた。私の心の中このピアノの音はそれから五年後の今日までつづいたのである。(『仮面の告白』二六九頁)

この場面は昭和十九年の時点における書かれる「私」と園子が出会う直前の場面である。ここで書かれる「五年後の今日」とは、書き手としての「私」の時間を示す。テクストの結末は昭和二十三年の「晩夏の日」であることから、書き手としての「私」は明らかにテクスト結末部よりも後の時点から書いていることが分かり、書かれる「私」と書き手としての「私」は時系列的に異なる存在であると言える⁵⁾。また書き手としての「私」は過去の自身のことを書いているが、その視点は決して過去の自身に寄り添っているとは言えない。

——五歳の元日の朝、赤いコーヒーの様なものを私は吐いた。主治医が来て「受けあへぬ」と言った。カンフルや葡萄糖が針差のやうに打たれた。手首も上膊も脈が触れなくなつて二時間がすぎた。人々は私の死体を見た。(『仮面の告白』一七九頁)

自家中毒に冒された「私」は瀕死の状態であり、このような観

察はできようはずもない。特に「人々は私の死体を見た」という一文は、決して「私」には語り得ないものである。これを「私」が語るためには、「私」は「人々」を見ていなければならぬが、「私」は「死体」である以上、それは不可能であろう。つまりこの出来事を語る「私」は、過去の自身に寄り添わずとも語る事が可能な存在となつてゐる。このように語りの次元においても、書かれる「私」と書き手の私は異なる存在であると言える。また「仮面の告白」と題されている以上、この書き手によつて語られることの真偽は曖昧になる。ここで「仮面の告白」という言葉の解釈が問題となつてくる。この「仮面の告白」という言葉は多義的であり、一つの解釈に絞ら込むことはできない。「仮面の告白」という語は次の三通りの意味に解釈することができらう。

- ①——「仮面」としての「告白」（フィクションとしての「告白」）
- ②——「仮面」による「告白」（「仮面」が「告白」する）
- ③——「仮面」であるところの「告白」（「告白」＝「仮面」）⁶⁾

先の書き手としての「私」と書かれる「私」の同一性を揺るがすのは①の意味においてである。書き手としての「私」がフィクションとして語つてゐるとするならば、過去の自身との同一性は必要とはされない。「自分らしい」存在が必要とされるのみである。「仮面の告白」という語の、その他の解釈に関しては後に言及することになるので、ここでは触れない。

次に問題となるのは書き手としての「私」と「作者」の関係性である。「私」という一人称が用いられている以上、書き手＝「作者」という見方は十分に可能である。しかしその見方の一因として、『仮面の告白』が作家である三島由紀夫の自叙伝的傾向をもつてゐる、という知識が前提となつてゐるように思われる。例えば同じ三島由紀夫の『金閣寺』（新潮社 昭和三十一年十月）も一人称で書かれたテキストだが、『金閣寺』の「私」（溝口）はあくまでも、書き手としての「私」に留まつており、「作者」として捉えられることは殆どない。

語り手は、また、内包された作者 (implied author) とも区別されなければならない。後者は、状況・事象を報告することはできないが、状況・事象の選択、配分、統合には責任を持つと考えられる。さらに、内包された作者は語り手のようにテキスト中に刻印されているのではなく、テキスト全体から推定されるのである。しかし、この語り手と内包された作者の区別には問題の出る余地がある。例えば、不在の語り手 (absent narrator) や、可能な限りの見えない語り手 (covert narrator) を語り手として持つヘミングウェイの「白象に似たる山々」の場合には、その区別は判然としなくなる。しかしデイケンズの『大いなる遺産』やリング・ラードナーの「床屋の話」のような等質物語世界的物語 (homodiegetic narrative) の場合には、その区別は極めて明快なものとなる。(G・プリンス『物語論辞典』遠藤健一訳

『仮面の告白』は書き手がテキスト中に現れる等質物語世界的物語であり、プリンスはそのような作品の書き手と「作者」との「区別は極めて明快」と述べている。⁹⁾ それにも拘わらず、『仮面の告白』において書き手＝「作者」（あるいは作家）と捉えるのは、いわゆる作家情報を参照することで導かれる読みであると考えられる。では『仮面の告白』の書き手としての「私」と「作者」を異なるものとして捉える場合、この二つはいかなる関係にあるのか。

私が現在の考へで当時の自分を分析してゐるにすぎないといふ誇りを免れるために、十六歳当時の私自身が書いたものの一節を写しておく。(『仮面の告白』二五三頁)

この描写に分かるように、書き手としての「私」はしばしばテキスト中に姿を現わす。これは即ち、書き手としての「私」がテキスト表象の一部であることを示している。つまり、「作者」と書き手としての「私」の関係は、表象する主体と表象物の関係にあると言える。

四 書く「私」の告白という表象

先に述べたように、本稿では「誰が」「どのように」「何を」

「告白」しているのか、を問題としている。まずは「誰が」という点について考えるが、これは書き手としての「私」と「作者」の両者である。「作者」の「告白」が、書き手としての「私」の「仮面の告白」という表象に拠っている以上、まずはそちらに着目すべきであろう。

書き手としての「私」は「何を」「告白」しているのか。ここで取り上げることがはしないが、多くの先行研究では「私」の同性愛的傾向に着目し、それを告白の内容としている。¹⁰⁾ 確かに告白の内容として、自身の同性愛的傾向は十分にインパクトのあるものであり、その読みが間違っているように思われないう。しかし自身の同性愛的傾向を告白するのみならば、同級生、近江との関係と、女性に対して不能を示した描写のみで事足りてしまい、第三章以降の園子との出会い、別離、再会の描写は蛇足に過ぎないということになる。¹¹⁾ 確かに同性愛的傾向も告白内容の一部ではあるが、テキストの大半を割いた園子との関係の中に、告白すべき内容があるのではないだろうか。いったい「何が」「告白」されているのか。まずは第一章において提示される三つの前提を見てみたい。

かうして私は二種類の前提を語り終へた。それは復習を要する。第一の前提は、糞尿汲取人とオルレ안의少女と兵士の汗の匂ひとである。第二の前提は松旭齋天勝とクレオパトラだ。

なほ語られなければならない前提が一つある。(『仮面の

最後の前提は「殺される王子」である。これら三つの前提はそれぞれに意味内容を持つが、それらを概観すれば、第一の前提からは悲劇的なものに感じる官能を、第二の前提からは扮装癖を、そして第三の前提からはサディスティックな性癖を見出すことができる。確かにこれらから同性愛的傾向を抽出することも可能だが、同性愛的傾向も含め、これらには「異質なもの」としての自己という共通項がある。しかし前提とは、結論を導くためのものであり、それ自体は結論から見出されるものである。つまり何らかの結論からこの三つの前提は導かれ、提示されているのである。そしてこれらは第二章において、「聖セバスチャン」像へ得た官能は、近江の姿に重ね合わされ、透視される。

……するとこの「悪」の意味は私の内部で変容して来た。それが促した広大な陰謀、複雑な組織をもつた秘密結社、その一糸乱れぬ地下戦術は、何らかの知られざる神のためのものでなければならなかった。彼はその神に奉仕し、人々を改宗させようと試み、密告され、秘密裡に殺されたのだ。彼はとある薄暮に、裸体にされて丘の雑木林へ伴はれた。そこで彼は双手を高く樹に縛められ、最初の矢が彼の脇腹を、第二の矢が腋窩を貫ぬいたのだ。つた。

私は考へ進んだ。さう思つてみれば、彼が懸垂をするために鉄棒につかまつた姿形は、他の何ものよりも聖セバスチャンを思ひ出させるのにふさはしかつたのである。(『仮面の告白』二四〇頁)

この描写には第一、第三の前提の要素、悲劇的なものとサディスティックなものへの偏愛が見出される。第二の扮装癖に関しては、若干の説明を要する。具体的には「私」が鏡の前で、腕を高く上げ、交叉させる場面やA海岸での「悪習」を挙げることもできるだろう。とはいえ、この扮装癖はより大きな問題を孕む。それは第一の前提でも語られる、「私が彼でありたい」という欲求であり、裏返せば「私は私でありたくない」という欲求である。⁹⁾「私」の性癖は同性に感じる官能であると同時に、それは「私」自身に映し出されるものである。第一章、第二章において、このように「異質なもの」としての自己が語られるわけだが、この「異質なもの」としての自己はそれ自体として見出されることはない。それらはあくまでも「正常さ」からの逸脱としてのみ発見されるのである。

ここでの「正常さ」とは「私」の考える、主に異性愛に代表される一般通念である。「私」は「正常さ」の内に入り込もうとする。しかしそれは決して「異質なもの」としての自己に由来するものではない。むしろ「正常さ」の側が「私」を取り込もうとするのである。この「正常さ」の暴力は「私」を異性愛へと導く。それは「私」に帰納法ではなく、演繹法によつて、

「正常さ」としての異性愛を志向させる。この人工的な異性愛は、額田の姉への思慕として描かれている。しかし「私」の園子への想いはそれとの差異を示す。

今まで私は子供らしい好奇心と偽はりの肉感との人工的な合金の感情を以てしか女を見たことがなかった。最初の一瞥からこれほど深い・説明のつかない・しかも決して私の仮装の一部ではない悲しみに心を揺ぶられたことはなかった。悔恨だと私に認識された。しかし私に悔恨の資格を与へた罪があつたであらうか？ 明らかな矛盾ながら、罪に先立つ悔恨といふものがあるのでなからうか？ 私の存在そのものの悔恨が？ 彼女の姿がそれをわたしによびさましたのであらうか？ ややもすれば、それは罪の予感に他ならないのであらうか？（『仮面の告白』二七九頁）

「私」は園子の美しさに心動かされ、額田の姉への想いとの差異を、「悔恨」という感情と語る。しかし書かれる「私」は未だ「罪」を犯してはおらず、書き手としての「私」はそれを「罪」に先立つ「悔恨」と語る。ここで言う「罪」とは「正常さ」からの逸脱である。それによって引き起こされるはずの「悔恨」という感情があつたというのは、書き手としての「私」の語る行為によって引き起こされた矛盾に他ならない。書かれる「私」は園子との出会いによって、「他者」を被つた。そこに引き起こされた感情は書かれる「私」にとつて未知のものであり、名

付けることができない。名付けうるのは未来の自分自身、書き手としての「私」である。しかしそのように語られた感情は、語られることによってのみ現前すると同時に、それ自体ではあり得ない。とはいえ、その感情は書き手としての「私」によって「悔恨」と名付けられ、始まりから「罪」、つまり「正常さ」からの逸脱を予言されるのである。

「私」の園子への想いは、演繹的なものではなく、帰納的なものとして現れる。つまり額田の姉の場合と異なり、「正常さ」という一般の原理が敷衍されたものとしてあるのでなく、あくまでも「私」の個人的な事象である。しかしそれは「正常さ」とは異なる結論を導く。

園子は私の腕の中にゐた。息を弾ませ、火のやうに顔を赤らめて、睫をふかぶかと閉ざしてゐた。その唇は稚なげで美しかつたが、依然私の欲望には慫へなかつた。しかし私は刻々に期待をかけてゐた。接吻の中に私の正常さが、私の偽りのない愛が出現するかもしれない。機械は驚進してゐた。誰もそれを止めることはできない。

私は彼女の唇を唇で覆つた。一秒経つた。何の快感もない。二秒経つた。同じである。三秒経つた。——私には凡てがわかつた。（『仮面の告白』三一九頁）

「私」は園子との接吻から官能を得ることができなかった。「私」は演繹法でも、帰納法でも、自身が「正常さ」の内にあること

を証明するに至らなかつたのである。しかし、この段階では未だ自身が「正常さ」から逸脱した、「異質なもの」であることを見現するには至っていない。「私には凡てがわかつた」と書き手としての「私」は語るが、ここではまだ証明できていない、というだけなのである。「私」がそれを発見するのは、テクストの結末部においてである。戦後、他の男性と結婚した園子と「私」は密やかな逢瀬を重ねる。それは「私」にとつて「正常さ」を作り出す試みである。「私」は肉欲を切り離した園子との関係において「正常さ」の内にあると試みる。しかし、それは脆くも崩れ去る。

私は園子の存在を忘れてゐた。私は一つのことしか考へてゐなかつた。彼が真夏の街へあの半裸のまま出て行つて与太仲間と戦ふことを。鋭利な匕首があの腹巻をとほして彼の胴体に突き刺さることを。あの汚れた腹巻は血潮で美しく彩られることを。彼の血まみれの屍が戸板にのせられて又ここへ運び込まれて来ることを。……

「あと五分だわ」

園子の哀切な声が私の耳を貫ぬいた。私は園子のはうへふしぎさうに振向いた。

この瞬間、私のなかで何かが残酷な力で二つに引裂かれた。雷が落ちて生木が引裂かれるやうに。私が今まで精魂こめて積み重ねて来た建築物がいたたましく崩れ落ちる音を私は聴いた。私といふ存在が何か一種のおそろしい「不

在」に入れかはる刹那を見たやうな気がした。目をつぶつて、私は咄嗟の間に凍てつくやうな義務観念にとりすがつた。(『仮面の告白』三六二頁)

園子の存在を忘れ、空想の官能に浸つていた「私」は、園子の言葉によつて「現実」を突きつけられる。「霊」は園子に惹かれていながら、若い男の「肉」を空想し、官能に浸つていた「私」に対する園子の言葉は、その分離の不可能性を突きつける。そしてそれは「私」という存在を「正常さ」から断絶させ、「私」の表層を漂う「正常さ」という仮面を打ち砕いたのである。それを書き手としての「私」は、「不在」に入れ替つたと語る。それは「私」が「正常さ」から逸脱することで、換言すれば、その仮面を失つたことでもたらされた自己同一性の喪失の体験である。それはまた同時に、新たな自己同一性の獲得でもある。しかしそれは曖昧模糊とした、表象されえない内面であり、「告白」によつて自己同定される必要がある。それこそが「私」に「告白」をさせる原因である。

ここまでできてようやく、書き手としての「私」が「何を」「告白」しているのかに言及することができる。しかしその前に、「告白」そのものについて考えなければならぬ。「告白」は「どのやうに」あるのか。柄谷行人は次のやうに述べる。

先に私は表現さるべき自己あるいは内面がアプリアリにあるのではなく、それは一つの物質的な形式によつて可能

になったのだと述べ、そしてそれを「言文一致」というシステムの確立においてみようとしたり。「言文一致」の成立過程をみると、それが従来の「言」でも「文」でもない「文」を形成するということが、そして確立されるやいなや、そのことが忘却されてしまうことがわかる。ひとびとはたんに「言」を「文」に移すのだと考えはじめるのだ。同じことが告白についてもいえる。告白という形式、あるいは告白という制度が、告白さるべき内面、あるいは「真の自己」なるものを産出するのだ。問題は何をいかにして告白するかではなく、この告白という制度そのものにある。隠すべきことがあつて告白するのではない。告白するという義務が、隠すべきことを、あるいは「内面」を作り出す。そして、そのことが自体がまつたく忘れられるのである。(柄谷行人『定本柄谷行人集 第一巻 日本近代文学の起源』岩波書店 平成十六年九月)

「告白」それ自体が、「真の自己」あるいは「内面」を生み出す。『仮面の告白』の書き手としての「私」の「告白」はまさにそのようなものとしてなされている。園子の言葉によって、自己同一性の喪失を体験した「私」は、同時に原体験としての「新しい自己」を獲得している。それは「告白」されることによってのみ現前化し、自らの顔として肉化する「仮面」である。つまり「私」には新しい仮面が必要であり、それゆえに「告白」しなければならぬのである。これは先に提示した「仮面の告

白」という語の解釈の③に当たる。「告白」＝「仮面」なのである。また語るという行為について三島は川端康成の「十六歳の日記」を評して次のように書いている。

十六歳の少年はしばしば涙を流してゐる。涙を流したと書くこと、それはむしろ流す前から書かれてゐたことに他ならなかつた。写す前に写されたものがある。書く前に書かれたものがある。(三島由紀夫「川端康成論の二方法」『決定版 三島由紀夫全集27』新潮社 平成十五年二月)

そこに起こつた出来事はすでに「世界」に書き込まれたものである。その上に書くことで、原体験として「世界」に書き込まれたものは抹消され、そこには変容した何ものかが生じる。これは書くこと、語ることが必然的に孕む作用であり、「真実」を語ることは原理的に不可能であることを指す。『仮面の告白』の場合、書かれる「私」の原体験は、書き手としての「私」に書かれることで、抹消され、「不在」化する。そしてそこには変容したものが生じる。しかし原体験は、語ることによつてのみ、そこに現前しうる。つまり真実を語るという告白は不可能であり、常に①の意味、フィクションとしての告白にならざるを得ないのである。書き手としての「私」の「告白」はこのようにしてある。

では「私」は「何を」「告白」しているのか。「正常さ」の仮面を打ち砕かれ、それからの逸脱を突きつけられた「私」は、

「異質なもの」としてしか存在しえない。同性愛的傾向はその「異質なもの」としての自己表象の一部であり、それは確かに「告白」されている。しかしその「異質なもの」としての自己を語らざるを得ない「私」を語るには、「正常さ」を心に懐いた自己をも語られなければならないのである。そしてこれは冒頭に掲げられたエピソードとも響き合う。「つまり悪行の理想を心に懐いてゐる人間が、同時に聖母の理想をも否定しないで、まるで純潔な青年時代のやうに、真底から美しい理想の憧憬を心に燃やしてゐるのだ。」（『仮面の告白』一七四頁）

五 「作者」の「告白」

ここまで書き手としての「私」の「告白」についての分析を行ってきたが、先に述べたようにこれ自体が「作者」の「告白」であるというように単純に接続することはできない。「告白」する主体としての書き手の「私」はあくまでもテキスト表象の一部であり、テキストという表象物は表象する主体、つまり「作者」なしには成立しない。しかし『仮面の告白』というテキストを、「作者」の「告白」と捉えた場合には、表象物／表象する主体という構造に揺らぎが生じる。『仮面の告白』を「作者」の「告白」として見ると、書き手としての「私」は「作者」自身である。逆に言えば、『仮面の告白』を「作者」の「告白」として捉えない以上は、書き手としての「私」を「作者」に還元することはできないのである。

今、書き手としての「私」は「作者」自身であると述べたが、これは決してこの両者がイコールであることを意味しない。先に述べたように「告白」という行為は、「世界」に書き込まれた原体験を抹消し、「真の自己」あるいは「内面」を、変容した何ものかとして生じせしめる行為である。つまり「作者」の原体験は「告白」されることによつて抹消され、変容した何ものか、つまり書き手としての「私」をそこに生じせしめる。書き手としての「私」は語られた「作者」、表象物として表れる。このとき書き手としての「私」と「作者」とは、前者が後者を代理し、補足するという代補⁽¹⁾の構造にあり、決してイコールではありえず、両者の間には差延⁽²⁾が見出されるのである。

しかしそれが、原体験を語ることで、それ自体を抹消し、変容させつつ、実体を明示する「告白」という行為の特性であり、それを通じてのみ「作者」の主体が見出され得る。つまり「作者」の「告白」によつて、書き手としての「私」は「作者」の「仮面」と化するのである。これは決して「作者」自身ではなく、変容した何ものか、「作者」の「仮面」に過ぎない。このとき、書き手としての「私」は②の意味、「作者」の「仮面」が「告白」とする状況になる。そしてそれを介在させることなしに「作者」を捉えることはできないのである。

では一体、「作者」は何を告白しているのか。書き手としての「私」と「作者」が同一人物である以上、書かれる「私」もまた同一人物である。当然、その存在の次元は異なる。「作者」は書く「私」と書かれる「私」とを分離し、テキスト中に表象

している。前節で明らかにした、書き手としての「私」の「告白」内容を踏まえつつ、告白する主体そのものも「告白」内容に加えれば、「作者」が「告白」しているものは、「正常さ」を心に懐きつつ「異質なもの」としての自己を語らざるを得ない自己である。そしてそれは「作者」の「仮面」となる。換言すれば、原体験としての「作者」ともいえるべき存在は抹消され、変容した存在、「仮面」と化す。テキストが閉じられたとき、そこに残るのは「作者」という「仮面」だけなのである。

六 結論

本稿は『仮面の告白』というテキストにおいて「誰が」「どのように」「何を」「告白」しているのかという問題意識に基づき、「作者」の「告白」のあり方に着目して論考を進めてきた。これまでの考察を踏まえつつ、テキストと作家の距離について考えることで、本稿の結論としたい。

『仮面の告白』において、「私」という存在は書き手としての「私」と書かれる「私」という二つのレベルにおいて存在した。書き手としての「私」によって「告白」されることによって、書かれる「私」は現前化するが、それは「世界」に書き込まれた原体験としての書かれる「私」そのものではありえず、書かれる「私」の原体験は書き手としての「私」によって語られることで抹消され、変容したものとして、つまりフィクション、「仮面」として、書き手としての「私」の上に現れる。つまり

書き手としての「私」の「告白」が「仮面」と化すのである。

一方で「作者」も「告白」をしている。『仮面の告白』というテキストを「作者」の「告白」として読んだとき、二つの「私」という存在と「作者」を同一と見做すことができる。とはいえ、その存在の次元は異なり、二つの「私」はあくまでもテキスト表象の一部であり、「作者」は表象する主体である。しかしテキストを「作者」の「告白」と捉えることで、表象物／表象する主体という対立構造は揺らぎ、表象物から表象する主体が透視される。書き手としての「私」は書かれる「私」を「告白」することで、「仮面」として現前する。「作者」はそのような書き手としての「私」を「告白」することで、オリジナルの「作者」は抹消され、変容した「仮面」として現前するのである。

本稿ではあくまでも『仮面の告白』というテキストから見出される「作者」を問題としてきた。ではこの「作者」は現実の三島由紀夫という作家とどのような関係にあるのか。『仮面の告白』で語られる出来事はほぼ三島の伝記と対応しているが、テキストの側から見出される「作者」は、どれほど忠実であっても三島由紀夫の虚像に過ぎない。しかし「告白」が忠実になされてもフィクションでしか有り得ないにもかかわらず、それを通じてしかその原体験が見出されないように、「作者」からのみ「作家としての三島由紀夫」は見出され得る。このとき、『仮面の告白』の「作者」は実像としてある。とはいえここで虚実を問うことに果たして意味があるだろうか。『仮面の告白』というテキストは三島由紀夫という原体験なしには現れ得ず、

その「作者」もまた同様である。しかしその原体験は、『仮面の告白』というテキストの「作者」の「告白」を通じてのみ現前化する。つまりこのとき、テキストに内在する「作者」と作家の虚実とは問題化せず、テキストと作家とは、「作者」を媒介とし、相互補完的に作用しているのである。『仮面の告白』におけるテキストと作家の距離とはそのようにある。

【注記】

1 三島は『仮面の告白』について、昭和二十三年十一月二日付坂本一亀宛の書簡に「今度の小説、生れてはじめての私小説で、もちろん文壇の私小説ではなく、今まで仮想の人物に対して鋭い心理分析の刃を自分に向けて、自分で自分の生体解剖をしようといふ試みで、出来る限り科学的正確さを期し、ポオドレルのいはゆる「死刑囚にして死刑執行人」たらんとするものです。」（決定版 三島由紀夫全集38『新潮社 平成十六年三月』と述べている。

2 この点について武内佳代は「三島由紀夫『仮面の告白』という表象をめぐって——1950年前後の男性同性愛表象に関する考察——」（『F—GENSジャーナル』平成十八年九月）において『仮面の告白』は『禁色』という表象から再帰的にホモエロティックな同性愛小説の表象を獲得し、「正典化」されたと論じ、『仮面の告白』が同時代に同性愛小説として受容されたことを否定している。

3 『テキストから遠く離れて』において加藤は、『デリダの『声と現象』（高橋允昭訳 理想社 昭和四十五年十二月）から「直観の、したがって直観の主体の、不在は、言述によってただ単に許容されるのではない。意味

作用一般の構造をそれ自体において少しでも考えてみればうなずけるように、直観の不在は意味作用一般の構造によって要求されているのである。直観の不在は根本的に要求されている。いいかえれば、或る言表の主体およびその対象の全面的不在——作家の死（la mort de l'écrivain）、もしくは（および）彼の書きえた諸対象の消滅——は意義作用のテキスト「[acte]」を妨げない。逆にむしろ、この可能性が意義作用を意義作用として生じさせるのであり、意義作用を聞かせたり読ませたりするのである。」（二部、加藤による改訳）という箇所を引用し、論を展開している。

4 加藤は橋本の論考を受け、「橋本は平岡公威を実と見るが、私は「三島由紀夫」を実と見る。」と述べている。

5 『仮面の告白』試論——ある、厭世詩家と女性——（『近代文学試論』昭和六十一年十二月）において有元伸子は、三島の伝記を参照しつつ、「書き手の時間的位置を「最終場面よりもさらに後である。」と論じている。

6 ここで提示した三つの解釈は田坂昂『増補三島由紀夫論』（風濤社 昭和五十二年四月）において提示されているものを参照した。また田坂は③の（告白）＝「仮面」という解釈を採用しているが、これら三つの解釈は複合的に適用されることで『仮面の告白』の解釈が拡がると考えられる。

7 物語論の用語としては「語り手」が主流だが、『仮面の告白』は明らかに「私」によって書かれたものであり、本稿の目的意識がその区別ないことから、本稿では「書き手」を採用している。物語を発信するツールとして声に拠るか、文字に拠るかという違いはあるものの、物語を発信する主体であり、テキスト機能の一部であるという意味においてこの二つは区別されない。

8 太田翼は「三島由紀夫『仮面の告白』論——仮構された告白」（『文化継承学論集』平成十八年三月）で、跡上史郎「最初の同性愛文学——『仮面の告白』の告白における近代の刻印」（『文芸研究』平成十二年九月）、有元伸子「三島由紀夫文学における性役割——男性性を中心に」（『金城国文』平成四年三月）を挙げ、『仮面の告白』が「同性愛」が主題であるという前提のもとに読まれている。」と述べている。

9 この点については既に九内悠水子が「三島由紀夫『仮面の告白』論——作家による告白、その二重構造——」（『近代文学試論』平成十五年十二月）において「仮面の告白」が（私）の男色を告白するだけのものならば、多少乱暴な言い方をすると、三章までで十分なのである。」と指摘している。

10 「不完全な青年と押し隠された少年——三島由紀夫『仮面の告白』から青年」（『群像』平成十三年十二月）において、高原英理が『仮面の告白』において「告白」されているものとして、「同性愛者である私」ではなく、「私でありたくない私」である」と述べており、この記述はそれを参照している。

11 デリダは『声と現象』（林好雄訳 筑摩書房 平成十七年六月）で、代補について「あとからそこにつけ加わると言われているような可能性が、それ（その可能性がつけ加わるはずのもの）をあつてで選れて産み出すのである。」と述べた上で、「代補として、意味するものは何よりもまず不在の意味されるものを、そしてそれだけを再、現前化する（表象||代理

する）のではなくて、別の意味するものの代わりになる。欠如している現前性とあいだに、差異の活動||戯れによって多面的になった別の関係を維持している、別種の意味するもの代わりになる。」と論じている。また「代補||性とは、まさしく差延であり、差延する活動である」とも述べている。

12 デリダは『ボジション』（高橋允昭訳 青土社 昭和六十三年四月）所収「記号学とグラマトロジー——ジュリア・クリステヴァとの対談」（『社会科学情報』昭和四十三年三月初出）において、「差延とは諸差異の、諸差異の諸痕跡の、システムティックな戯れであり、間隔化のシステムティックな戯れであつて、この間隔化によって諸要素は相互にかかわりあう。」「*différance*（差延）の *a* が含意する活動性もしくは産出性は、諸差異の戯れにおける生産的運動へ指し向ける。（中略）差延は体系的かつ規則的な諸種の変形を産出するのであるが、それらの変形は、ある程度まで、構造的科学的に活動の余地を与えうる。差延という概念は、「構造主義」の最も正当な原理的諸要求を展開させるのである。」と差延について述べている。

※ 『仮面の告白』の本文の引用は全て『決定版 三島由紀夫全集1』（新潮社 平成十二年十一月）に拠り、本書の引用に際しては頁数のみを表記し、ルビ、傍点は省略した。

（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程一年）